The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	がんの自然治癒
Author(s)	岩永, 剛
Citation	癌と人. 2013, 40, p. 21-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24902
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

がんの自然治癒

岩　永　　剛*

I. はじめに

がんが何も大した治療を行っていないのに、自然に治ってしまうということは、考えられません。しかし、組織学的に確認された大腸癌腫瘤が、２カ月後に手術を行なった時には消失していたり[1]、肺に転移した多発性の肝細胞癌が何もしていないのに転移診断３カ月後には消失し、高かった腫瘍マーカー値も低下してしまったという症例[2]などが、日本からも次々と発表されるのを見ていると、このような不思議な現象が本当に頻繁に起こるのかということを調査してみようと思い、検討してみました。

なお、この論文中の用語や文章に【注】という記号を付けて、その内容の解説や筆者の感想などを各項の文末の黒枠内に記しました。

Ⅱ.「がんの自然治癒」の定義

一般には、「がんの自然治癒」という言葉がよく使われますが、その定義はかなり難しいです。

先ず、「がん」であることを証明するために、病理組織学的に、あるいは細胞診で「がん」であることを確かめる必要があります。さらにこれがなくても、X 線写真、CT 像、MRI、超音波検査などで明瞭な腫瘤像が認められ、血中の腫瘍関連マーカーが高値を示していることで、「がん」と診断された症例も含まれます。

次に、「自然」というのは、治療が全く行なわれなかったものと、「がん」に対しては有効とは考え難い療法が行なわれたものも含まれます。

次いで、「がんの治癒」ということを医学的に証明するのは、非常に難しい課題です。腫瘤及びその近傍、さらに遠隔部の全身の全ての臓器にがん細胞が認められないことを綿密に検索して証明しなければなりませんが、これらを行なうことは死亡後の剖検でさえほとんど不可能です。さらに、腫瘤が縮小し、症状などが緩和したものも含めて、　「**治癒**：**Cure**」という言葉を使わずに、「**退縮**：**Regression**」という用語が用いられます【注１】。このように、厳格に医学的な用語を用いるのであれば、本表題も「**がんの自然退縮**」とする方がよいと考えられます。

> 【注１】 **治癒**と**退縮**：このことについては、森の論文[3]で詳しく述べられています。

Ⅲ. 本研究の歴史

がんが自然に治ることもあるということは、19 世紀から報告されていましたが、20 世紀の半ば過ぎに Everson と Cole（1956）[4,5,6]がこれら症例の詳細な研究発表を行なってから、世界中の研究者が注目し始めました。日本では、辻ら（1969）[7]の報告が最初で、その後、陣内・森の癌学会発表（1972）[8]以来話題に上がり始め、以後多くの発表が続いています。

Ⅳ. 自然退縮の頻度

がんが自然退縮する頻度は、６万人～ 10 万人に１人ぐらいの頻度でみられると言われています[9]が、その正確な率は不明と言わざるを得ません。日本では、2006 年に約 70 万人の人が新たにがんと診断されており[10]、一方、

＊大阪成人病予防協会常任理事

2011 年の 1 年間にがんが自然退縮したという学術論文発表は **13 例**[11～23]【注２】ありましたので、やはりほぼ上記のような頻度となります。この数値から計算すると、日本では、大略 4 週間に 1 名の割合で自然退縮が起こっていることになります。

さらに、最近は自然退縮の症例報告の発表が増えている[24]ようです。【注３】

【注２】 この **13 例**は、PubMed（米国国立医学図書館が提供している医学・生物学に関する主として英語の論文文献データベース）で調べた世界的な医学学術雑誌に掲載されていた日本における各種悪性腫瘍の自然退縮症例報告の合計で、これ以外に、2011 年に日本で発表された医学雑誌、あるいは 2011 年に開催された多くの学会や研究会で発表された症例報告が 37 例以上もあり、これらは含まれていません。これらを入れると、50 例以上の症例が自然退縮を起こしていたことになります。

【注３】 ヒトの身体は、ほぼ 60 兆個の細胞から出来ており、これらの細胞は新陳代謝のため、毎日新しい細胞が誕生して成長し、古い細胞は死んでいきます。細胞が分裂して新生するときに出来損ないの細胞もあり、このような細胞は生きていけないためにほとんど死滅して脱落してしまいます。このように出来損ない細胞の一種にがん細胞もあり、毎日 5000 個のがん細胞が新生しているとも言われます。この出来損ないがん細胞のほとんど全ては死滅してがん腫瘤まで成長出来ていないことを考えると、がん細胞の自然治癒は、頻繁に生じているということになります。

Ⅴ．がんの種類

どのようながんが自然退縮を起こしたかを**表 1** に示してみました。最も多いのが、腎臓がん（99 例）、次いで悪性黒色腫（92 例）、さらに、神経芽細胞腫（73 例）、リンパ腫（68 例）、白血病（53 例）、網膜芽細胞腫（50 例）、乳がん（43 例）と続き、これらに Everson ら[6]の発表で上位にあった絨毛がん（19 例）と膀胱がん（17 例）の 9 疾患を併わせると合計 514 例を占め、全体 741 例の 69％に達します[26]。

表 1　がんの種類別の自然退縮症例数

がんの種類、部位	Everson & Cole[6] (1900～1965 年)【注 4】	Boyd[25] (1900～1965 年)【注 5】	Challis ら[26] (1966～1987 年)【注 6】	合計【注 7】	順位
腎臓がん	３１	0	６８	**９９例**	1
悪性黒色腫	１９	4	６９	**９２例**	2
神経芽細胞腫	２９	3	４１	**７３例**	3
リンパ腫	0	0	６８	**６８例**	4
白血病	0	0	５３	**５３例**	5
網膜芽細胞腫	0	１７	３３	**５０例**	6
乳腺	6	１５	２２	**４３例**	7
精巣	7	1	１６	**２４例**	8
肺	1	4	１８	**２３例**	9
絨毛がん	１９	0	0	**１９例**	10
結腸・直腸	7	1	１０	**１８例**	11
胃	4	3	１０	**１７例**	12
膀胱	１３	0	4	**１７例**	13
肝臓	2	2	１０	**１４例**	14
軟部組織がん	１１	2	0	**１３例**	15
その他	２７	9	８２	**118 例**	16
合計	**１７６例**	**６１例**	**５０４例**	**741 例**	

さらに、この 741 例の 60％が 1 年以上生存し、25％の症例が 5 年後もなお生存していたと記されています[26]。

最近は、肝細胞がん[27]、肺がん、肺転移巣の自然退縮症例の発表が多くなっていますが、その点については、別の機会に検討して発表します[28]。

【注４】 **Everson と Cole（1966）**[6]は、1900 年以来、1965 年までに世界中の文献上に発表された症例や、個人的な連絡により集めた症例のうち、がんの自然退縮と判定した 176 例について発表しました。但し、これら症例のうち、がんの完全な消滅は 15 例だけでした[26]。また、リンパ腫、白血病、網膜芽細胞腫

の症例は、臨床経過などから良性との鑑別が難しいので除外しています。

【注５】 Boyd（1966）[25] は、Everson らの調査で脱落した症例を選び出し、とくに、網膜芽細胞腫の症例を加えた 61 例を報告しました。

【注６】 Challis ら（1990）[26] は、Everson らの基準に従い、さらに、リンパ腫、白血病、網膜芽細胞腫の症例も加え、1966 年から 1987 年までの文献報告から選び出した自然退縮の 504 例について発表しました。

【注７】 各がん種別の**自然退縮症例の合計数**：Challis らの論文 [26] の Table １と Table ２に掲載されていた上記３者の症例数を合計して、**表１**に示しました。

Ⅵ. 自然退縮を起こす原因

このようにがんが自然退縮を起こす不思議な現象の原因・理由については、多くの研究者が検討してきましたが、確固たるものはないようです。**表２**で示した**自然退縮の原因・理由**【注８】の中で、確実に腫瘍を退縮させる方法は無く、偶然にこのような因子が腫瘍に働いて退縮させたり、治癒に導いたものと考えられます。

表２　がんの自然退縮の原因・理由【注８】

１．ホルモンの影響
２．感染症
３．アレルギー　または　免疫反応
４．腫瘍病巣への血行障害
５．酸素と栄養の不足
６．急速な腫瘍増殖
７．発がん物質・腫瘍増殖因子の排除
８．アルコール摂取の中止、禁煙
９．通常は無効な治療法に対して感受性の増強
１０．ハーブ、BRM（生物学的応答修飾物質）
１１．発熱、温熱
１２．腫瘍の生検・外科的侵襲
１３．大量出血、低血圧
１４．腫瘍以外の部位への放射線照射
１５．表層より隆起した腫瘍の自然脱落
１６．遺伝的要因、家族性発生
１７．精神状態、心構え、精神療法
１８．補完代替医療

これらのうち、「１０．ハーブ」、「１１．温熱」、「１７．精神状態」、「１８．補完代替医療」によりがんが治ったという報告などについては、筆者も既に本誌に何回か記述してきました [31, 32, 33, 34]。

【注８】 **表２**で示した**自然退縮の原因・理由**は、Everson ら [6]、Cole [29]、Kondo ら [30]、Abdelrazeq [35] が記載していたものに、筆者の案も入れて作成した内容のものです。

Ⅶ. 筆者の意見

このように多くのがんの自然退縮症例を見てくると、「がんは、たいした治療をしなくてもそのうちに治る。」と考えたくなりますが、そのようなことを、絶対に信じないでください。やはり、がんを治すための治療法は、手術等による腫瘍の摘除であり、放射線照射による腫瘍の壊滅であり、抗がん剤などの化学療法により腫瘍細胞を死滅させる３方法が原則であることは変わりません。これら自然退縮は、偶然に生じた現象で、意図的に行なった成果ではありません。ただ言えることは、どんながんでも、治る可能性を秘めているということです。とくに、温泉療法や、ハーブ・健康食品の摂取や、生活態度の改変によりがんが治ったという報告は、がん患者さんに**希望を持たせ、やる気を起こさ**

せます【注９】。

しかし、注意しなければならないことは、このような方法で良好に経過した症例を提示し、その方法や、これらに関係する物品を販売するための宣伝広告に利用しているものが目につきます。このような誇大広告には、くれぐれも気を付けてください。

【注９】 希望とやる気：がんになっても明るく、がんに敗けない気概で生活していると、免疫力が向上し、がん罹患後の生存率が高く[36]、がんに対する力強い心構えが、がんに対しても効果があったことについては、以前にも記述した内容[33]ですので、参考にしてください。

Ⅷ. おわりに

以前から気になっていた「がんの自然治癒」について記述してみました。このような「自然退縮」の症例報告は、毎年、世界的な学術雑誌に２０例以上報告されています。これら退縮に至った原因をさらに究明していくと、新たながん治療法が創案されるのでないかと期待しています。

Ⅸ. 参考文献

(1) 中嶌雅之，他：自然消失した大腸癌の１例. *日臨外会誌*，**73**：1482-1485,2012.

(2) Harimoto N，*et al*：Spontaneous regression of multiple pulmonary recurrences of hepatocellular carcinoma after hepatectomy:report of a case. *Surg Today*，**42**：475-478,2012.

(3) 森武貞：癌の自然治癒. *MEDICO*, **4(4)**：23-27,1973.

(4) Everson TC，Cole WH：Spontaneous regression of cancer:preliminary report. *Ann Surg*, **144**：366-383,1956.

(5) Everson TC：Spontaneous regression of cancer. *Ann NY Acad Sci*, **114**：721-735, 1964.

(6) Everson TC and Cole WH：Spontaneous regression of cancer:a study and abstract of reports in the world medical literature and of personal communications concerning spontaneous regression of malignant disease. WB SAUNDERS COMPANY：Philadelphia and London，1966.

(7) 辻公美，他：癌の自然治癒 , その臨床的統計観察. *癌の臨床* , **15**：729-733,1969.

(8) 陣内伝之助，森武貞：癌の治癒と再発 ― 外科の立場から. 日本癌学会総会記事 , 第 31 回総会 (名古屋)：S-4,October 1972 年.

(9) Cole WH：Efforts to explain spontaneous regression of cancer. *J Surg Oncol*, **17**：201-209,1981.

(10) 公益財団法人がん研究振興財団：がんの統計'11,4. 部位別がん罹患数（2006 年）. 2012 年 04 月 27 日.

(11) Iwatani T，*et al*：Complete spontaneous regression of primary diffuse large B-cell lymphoma of the breast. *J Clin Oncol*, **29**：e113-115,2011.

(12) Yanagihara Y，*et al*：Spontaneous regression of metastatic renal cancer after short-term treatment with sunitinib. *Int J Urol*, **18**：258-259,2011.

(13) Nagao S，*et al*：Regression of a primary pulmonary adenocarcinoma after zoledronic and monotherapy. *Hiroshima J Med Sci*, **60**：7-9,2011.

(14) Okuma K，*et al*：Abscopal effect of radiation on lung metastases of hepatocellular carcinoma:a case report. *J Med Case Rep*, **5**：111,2011.

(15) Sakai K，*et al*：Spontaneous regression of multicentric pilocytic astrocytoma with CSF dissemination in an adult. *Brain Tumor Pathol*, **28**：151-156,2011.

(16) Kawaguchi K, *et al*：Multiple thymic carcinoids. *Ann Thorac Surg*, **91**：1973-1975,2011.
(17) Ono H, *et al*：Spontaneous regression of germinoma in the pineal region before endoscopic surgery:a pitfall of modern strategy for pineal germ cell tumors. *J Neurooncol*, **103**：755-758,2011.
(18) Sadamoto A, *et al*：Spontaneous regression of pulmonary metastases from malignant phyllodes tumor. *Jpn J Clin Oncol*, **41**：915-917,2011.
(19) Mizuno T, *et al*：Complete spontaneous regression of non-small cell lung cancer followed by adrenal relapse. *Chest*, **140**：527-528,2011.
(20) 新井ほのか、他：関節リウマチ患者に発症した節外性 NK/T 細胞リンパ腫. *臨床血液* , **52**：551-555,2011.
(21) 前嶋隆平、他：10 ㎝大の肝細胞癌が自然退縮切除標本により完全壊死を証明できた 1 例. *日消誌* , **108**：1902-1909,2011.
(22) Takeishi G, *et al*：Spontaneous regression and regrowth of central nervous system lymphomatoid granulomatosis —case report—. *Neurol Med Chir*, **51**：801-804,2011.
(23) Furukawa M, *et al*：Spontaneous regression of primary lung cancer arising from an emphysematous bulla. *Ann Thorac Cardiovasc Surg*, **17**：577-579,2011.
(24) Chodorowski Z, *et al*：Spontaneous regression of cancer-review of cases from 1988 to 2006. *Przegl Lek*, **64**：380-382,2007.
(25) Boyd W：The spontaneous regression of cancer. Springfield Ⅲ : CC Thomas,1966.
(26) Challis GB and Stam HJ：The spontaneous regression of cancer. A review of cases from 1900 to 1987. *Acta Oncologica*, **29**：545-550,1990.
(27) Epstein RJ and Leung TW：Reversing hepatocellular carcinoma progression by using networked biological therapies. *Clin Cancer Res*, **13**：11,2007.
(28) 岩永剛：がんの自然退縮 —とくに 2006 年～ 2011 年に文献発表された肝細胞癌と肺腫瘍について—. *癌と化学療法* , 2013(投稿中).
(29) Cole WH：Spontaneous regression of cancer:the metabolic triumph of the host? *Ann NY Acad Sci*, **230**：111-141,1974.
(30) Kondo S, *et al*：Spontaneous regression of hepatocellular carcinoma. *Int J Clin Oncol*, **11**：407-411,2006.
(31) 岩永剛：漢方薬でがんを治すことができるのか？ *癌と人* , 第 **39** 号：20-31,2012. 大阪癌研究会発行.
(32) 岩永剛：温泉とがん. *癌と人* , 第 **36** 号：15-25,2009. 大阪癌研究会発行.
(33) 岩永剛：性格、心理状態と病気（とくにがん）との関連性について. 癌と人 , 第 **30** 号：17-21,2003. 大阪癌研究会発行.
(34) 岩永剛：がんに対する補完代替医療について. *癌と人* , 第 **37** 号：8-20,2010. 大阪癌研究会発行.
(35) Abdelrazeq AS：Spontaneous regression of colorectal cancer:a review of cases from 1900 to 2005. *Int J Colorectal Dis*, **22**：727-736,2007.
(36) 中川俊二、他：癌の自然退縮および長期生存例に関する心身医学的考察 : 消化器癌を中心とした局所リンパ球浸潤の態度および全身免疫能の変動と心理面について. *心身医学* , **21**：217-227,1981.